

年間第8主日 2月27日 分かち合い

ルカ 6-93～45

コロナ禍で、公開ミサのない主日が続いています。現実には、身近なところで感染者が出ていることを考えれば、これもやむを得ない措置ですが、これを機に教会から足が遠のく人が少なくないことで心が痛みます。

個人的に祈り、み言葉を味わうこともできますが、教会が、神のみ言葉によって招かれた人々の集会であることを考えると、いつまでもこの状態が続いてよいはずはありません。来週から始まる四旬節には、是非、公開ミサをささげ、主と共に賛美できるよう祈りましょう。

今日選ばれた福音は、今年のはじめから読まれているルカ福音書の続きです。山から下って、弟子たちと人々に語られたイエスの説教の後半です。今日は特に、人間に与えられている、素晴らしい恵み、目と口についての戒めと言ってよいでしょう。

「兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」とイエスは言われます。

人間は、とかく、他人の欠点や失敗に注目し、心の中で人を裁いたり、厳しいまなざしを向けたりしながら、自分の間違いを指摘されると、我慢できずに不機嫌になったりします。

第一朗読のシラ書の著者が「人間も話をすると欠点が現れてくるものだ・・・心の思いは話を聞けば分かる」と言うように、イエスも、「人の口は、心からあふれ出ることを語る」と言われます。言葉で、素直に自分を表わすこともできますが、往々にして、本来の自分を隠したり、よく見せようとしたり、はては、人を欺こうとさえします。

目は心の窓、口は心の発信機と言ってよいでしょう。素晴らしい恵みだからこそ、上手に、神の望みにかなった使い方をしなければなりません。

人となられた神の子イエスは、神の心をもって人の目線で人を、そして、物事をごらんになりました。イエスは、神の心に隠された思い、望み、意志、そして愛を、人間の言葉で語ってくださいました。目だけでなく、言葉だけでなく、その振舞い、態度、眼差し、そして、存在そのもので、神を語ってくださいました。

み言葉の恵みに与ったわたしたちも、与えられた素晴らしい賜物を、自分をより豊かにし、人を喜ばせ、希望を与える使い方ができるよう、主の導きを祈りましょう。(S.T.)